

延岡総合文化センター開館40周年記念  
文化祈念シンポジウム

＜日時＞令和7年6月8日（日）14：10～16：00

＜場所＞延岡総合文化センター（大ホール）



■テーマ

「延岡の文化を想う！ ～次代を担う子供達のために～」

■登壇者

- |            |       |                       |
|------------|-------|-----------------------|
| ＜コーディネーター＞ | 水永正憲  | 〔延岡市キャリア教育支援センター長〕    |
| ＜シンポジスト＞   | 谷口史子  | 〔延岡市文化連盟事務局長〕         |
|            | 後藤紀子  | 〔ひむかオペラの会会長〕          |
|            | 江原トネ子 | 〔(一社) のべおか風と土の学校代表理事〕 |
|            | 甲斐英哉  | 〔延岡市保育協議会会長〕          |
|            | 上米良剛  | 〔延岡市小中学校教頭会会長〕        |
|            | 青井雄二  | 〔(公財) のべおか文化事業団事務局長〕  |



□水永

只今からシンポジウムを始めさせていただきます。  
私は進行役を務めさせていただきます、延岡市キャリア教育支援センターの水永と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

この文化シンポジウムのタイトルは文化祈念となっておりまして、記念式典の記念の間違いじゃないかというふうに感じられるかもしれないんですけど、これは間違いではございませんで、これからの延岡の文化を祈るような気持ちで、これから様々なことをお話をいただいて、何よりここにありますように、次の時代を担う子どもたちに、この延岡の文化伝統歴史をどう伝えていけばいいのか、そういうことを

一緒に考えることができればいいなと思っております。

今日は大きくは3つに分けてお話をさせていただこうと思うんですね。最初に6人の方々にそれぞれの文化団体でどんな活動に取り組んでいらっしゃるのか、これからの課題をどう考えていらっしゃるのかというお話をいただいて共有したいと思います。

2つ目に今地域や学校で様々な社会的な課題があると言われております。変化が起きていると。どんな課題をこの文化の面で感じていらっしゃるか、それをお互いに出していただこうと思います。

最後にこれからの文化活動をどう進めていけばいいのか、このタイトルにもありますが、次の時代を担う子どもたちにどう伝えていけばいいのかということを最後に語り合っていいただこうと思います。

2時間ほどの長丁場になりますので大変ですが、最後まで皆さんと気持ちを共有できるような場になれるといいなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



## テーマ①

### <文化活動の現状と課題>

□水永

それでは最初ですが、それぞれの立場でどんな文化活動に取り組んでいらっしゃるのか、紹介をしていただきながら、これからの課題についてもお話をいただこうと思います。

最初に、延岡市文化連盟の事務局長でいらっしゃいます谷口さんの方から お願いしたいと思います。よろしくお願いします。



□谷口

皆様改めまして、こんにちは。昨年10月から延岡市文化連盟の事務局長を担当しております谷口史子と申します。

今日ご参加の皆様方の中には、私が学校時代に随分お世話になった方もたくさんおられるように思います。校長時代は黒岩、北方、旭、南、四つの中学校で校長を務めさせていただきまして、その後は、実は京都の私立の小学校、中

学校の校長を4年ほどしておりまして、2年前に帰ってきました。もう少し延岡のために頑張れということで文化連盟の事務局長を授かったところです。本来は保健体育の教員でして、なぜ谷口が文化連盟なんだと思っておられる方もたくさんおられるかもしれません。ただ、今まで見てきた世界とそして学校から見てきた世界と違う世界を、この文化連盟の事務局長として今見ているような気がします。見えていなかったものが見える、それとやってみてわかる世界、やり始めた今だからこそ、

今の気づきを大事にしたい、そんな思いでもおります。

現在、延岡市文化連盟は、この令和7年度に実は創立76年。ものすごく長い歴史を持っております。加盟団体数が、この4月の段階で105団体。会員さんが3000名を超える。県内でもかなり有数の連盟でございます。協力する皆様は本当に様々な取り組みを実はなされております。学校の時には気づかなかったこともたくさん実は今あります。ここで全てを紹介することが本当に難しいくらい多岐にわたり、この後お話をされるオペラの後藤さん、風と土の学校の江原さん、なんと、保育協議会の甲斐さんも、皆さんはこの文化連盟の会員であります。

このような会員さんの取組の中で、私の方からは1つだけご紹介させていただきます。この取り組みは、「一幅一瓶展」でございまして、その作品の担当を決められて、お花の先生方がその書道に合わせてお花をいけるといいます。全国的にも非常に珍しい取り組みで、単発でやる市町村はございますが、延岡のように60年を超える歴史を持っているという取り組みは、極めて珍しい取り組みと言われているようです。ぜひ皆様も見に来ていただけるといいなと思いますが、このような取り組み、会派、流派、部門を超えた取り組みは、実は今後とても大事になるんじゃないのかなという風にも思っているところです。ただその一方で、2020年3月のコロナによる緊急事態宣言後の状況により、コロナ禍、そして社会生活の変化を受けて、人と人とのつながりが非常に希薄化している現状がございます。文化連盟所属の団体様も対面活動が制限されたりできなかったり、私は当時、京都の学校にいましたけど、特に音楽関係の活動の制限はものすごく厳しいものだったなと思っております。先ほど延フィルの皆様が演奏してくださいましたが、ああいった演奏が人がいるところでは一切できない、そういった制限がございました。そういったところの中で活動が制限されるだけではなくて、離れていくという状況も発生しました。この状況は実は今も続いているという風に感じております。加盟団体の皆様は本当に日頃の活動ができなくなったことによって、日々の生活の楽しさを奪われたような思いもされてきたのではないかと感じております。次のシートをお願いします。

延岡における伝統や文化を長く継承してこられた、とても努力をされてきた皆様の思いや形を継承していくことが困難になっている現状、これを本当に真剣に重く受け止めて、何とかしなくてはいけないという思いで一杯です。何より大人だけではなくて、子どもたちの文化離れ、対面活動の制限から、何もしなくてもその間にデバイスがいっぱい広がり、GIGAスクールが広がり、直接体験しなくてもやれたと思ってしまっている保護者や子どもも増えてきている。そんな中で、やはり体験を大事にする活動、これをどうしていくかというのを、文化連盟としては非常に大きな問題である、課題であると今捉えているところです。以上です。

□水永

ありがとうございました。先ほど文化連盟の団体が、105団体で約3,000人というそういう大きな人数の規模なんだなと思ったんですけど、この最近の数字に対してはどのように感じておられるのでしょうか。

□谷口

実はこの数字、3,000名を超えるというのは、昨年10月の調査に基づくものでございます。2年前、コロナの時に減っている状況と比べても、300人ほど落ちてきている。特に子どもの減少というのは厳しいところがあるかなというふうに思っています。

## □水永

はい、ありがとうございます。それでは続いて、ひむかわペラの会の後藤さん、先ほどとても素晴らしい歌声を聞かせていただいたんですけど、ありがとうございます。あのまんま、あの赤いドレスで出てきていただいてよかったんですけども、ちょっと着替えられました。後藤さん、よろしくお願いいたします。



## □後藤

先ほどは聞いていただいてありがとうございました。あの服装で出るとすごく浮いてしまうことになりますので、普通の格好で参りました。私は「ひむかわオペラの会」の会長をしておりまして、あと一つ、「のべおか第九を歌う会」でも指導しておりますので、この2つの団体についてちょっとお話しさせていただきたいと思います。

まず先ほど聞いていただいた「ひむかわオペラの会」ですが、オペラの研究団体として2010年に発足して、今年で15年になります。会員は現在、声楽家17名、ピアニスト2名、そして事務局1名で、宮崎県にゆかりのあるメンバーで構成されています。会の活動としましては、これまでに延岡にあるオーケストラ、延岡フィルハーモニー管弦楽団、先ほど一緒に演奏していただきましたが、オペラのコンサートを2回、あと本格的なオペラ公演、これを今までに5回しております。ちょっと出してもらいますかね。2012年、これがコウモリです。一番最初にした、これが喜歌劇、オペラのもう1個軽い感じの喜歌劇という分野になりますが、コウモリ。そして2014年にカルメン。そして2017年に魔笛、モーツアルトの魔笛です。そして2019年にラボ・エーム。ラボ・エームに関しては、延岡と宮崎の2会場で上演しております。そして今年の8月10日に6年ぶり5回目となりますオペラ、モーツアルト作曲のコジ・ファン・トゥッテをここの大ホールで上演いたしますので、ぜひたくさんの方々に来てもらいたいと思います。また、会単独の公演として「オペラの夕べ」というコンサートや、小中学校に出向いてのスクールコンサート、生の歌声を届けるスクールコンサート、またイベントでの演奏などを通じてオペラを知っていただくという活動を行っています。こうした活動を続けておりますけれども、やっぱり私たちの課題としましては、若手の入会と育成というところにあります。最初に入ったメンバーもまだ元気で活動しておりますが、だんだん高齢化をしていって、若い人が育っていかないと、どこの会もそうだと思いますけれども、継続が危ぶまれるということになります。ただ、今なかなか音楽を大学で学ぶ生徒も減っております。これは原因はいろいろあって、後からもお話が出るとは思いますけれども、音楽の授業数も減っているというのも勿論ありますし、そもそも音楽を大学で学ぶというような生徒も減っております。中でも声楽、声を専門に学ぶ人も減っておりますのでなかなか厳しいですけれども、そういう人たちをできるだけうちの会に入ってもらえるようにして、みんなで盛り上げていくというふうにしていきたいと思っています。もう一つの課題としましては、私どもオペラをやりますと、オペラというのはかなりお金がかかります。ものすごくセットも本格的にオーケストラと一緒にやったりする本格的なオペラです。そのためにはかなりお金がかかります。そして東京なんかでオペラを見るとチケット代は万単位ですね。ご存知の方もいらっしゃると思いますけれども、そういうチケット代は都会ではいけるんですけど、どうしても延岡ではどうしても高いチケットになると、いやもうオペラなんて入

場料が高いわということで、もう敬遠されてしまいますので、できるだけ安いチケットに抑えて、たくさんの方に来ていただくというために、私のオペラの会に賛助会という組織もついていたいて、賛助会からの資金の援助だったり、いろんな助成金を申請して、のべおか文化事業団の方に核になっていただいて補助金を申請して、その補助金とか、たくさんの協力を得ながら、なるだけチケット代を安い値段で毎回オペラを頑張っております。こういう活動を今からも続けていきたいといけないだろうなと思っております。

次に私がもう一つ、「のべおか第九を歌う会」というところの指導をしております。この「のべおか第九歌う会」というのが、1986年、この文化センターができた年に開館を記念してできた団体になります。なので年齢で言うと、この文化センターと同じ年ということになります。この「第九を歌う会」は、名前の通り、ベートーヴェン作曲の交響曲第9番の第4楽章、合唱があるんですけど、そこを歌おうという、そのために結成されている合唱団になります。基本的に毎年12月に公演をしまして、日本中でもそうですが、延岡でも第九の曲が流れてくると、年末だなという感じになっているかと思います。今年で38回目の演奏会ということになります。この合唱団は毎年募集をかけて、そこで毎回集まってくれていただくことになっております。延岡市内だったり、延岡市外、そして県外からも第九を歌いたいと言って来ていただく方がいらっしゃいます。最初学生会員は高校生以上だったんですけど、今は小学生、中学生と枠を広げて、できるだけ若い頃から第九に参加して一緒に歌いましょうということにしています。難しい曲ではあるんですけども、歌える部分だけでもいいから一緒に歌って、一緒に参加して、それで長く第九が続いていければいいなあというのもありまして、そういうところにも力を入れております。2022年からはオーケストラが、今まで九州交響楽団のオーケストラだったんですが、それから地元のオーケストラ、延岡フィルハーモニー管弦楽団さんをお願いをして、そこと一緒に第九演奏会をするという流れにしております。ただ、経済的な問題、いろんな理由などから、オーケストラとの演奏は3年に1回というのがありまして、残りの2年、どうしよう、いろいろ意見があったんですけど、やっぱり歌わないというのはよくない、どうにかして毎年歌っていききたいという声が上がって、中の2年間は野口遵記念館の方で2台のピアノの伴奏で第九の4楽章を演奏する。それと、ちょうどクリスマス、12月の季節にありますので、うちのオペラの会や延フィルさんの協力とか、他の団体の協力を得て、クリスマスの曲なんかも一緒にやったりして、もうちょっと楽しめる感じのコンサートという形の2年間の企画となっております。今年も12月の13日に野口遵記念館の方で、第九とクリスマスの夕べというのをを行う予定にしております。こういう活動をしております第九ですが、オペラの会と同じように課題は団員の確保と公演資金の確保になります。のべおか第九、最初は300人ぐらい合唱団がいて、ここの大ホールにぎっしり人がいたらしいです。事務室の方に写真があるかなと思うんですけど、もうあふれんばかりの合唱の人数の過去の写真があります。それがだんだん減ってきて、今では100名を切るぐらいになってきています。合唱団の方もだんだん高齢化もしておりますので、できるだけ新しい会員さん若い会員さん学生会員さんの参加を呼びかけて、できるだけ毎年ある程度的人数を集めたいなと思っております。資金確保につきましては、2022年から組織委員会というのを結成しまして水永さんにお世話になっているんですけど、第九の伝統をつなぐ会として企業などからのチケットの購入協力などをお願いしてなんとか資金の確保に努めているところです。以上です。

□水永

はい、ありがとうございました。先ほど「ラ・ボエム」の演奏というのは、延岡だけでなく、宮崎市でも開催されたっておっしゃったんですけど、どんな経緯があったんですか。

□後藤

2017年にモーツァルトの「魔笛」をこの大ホールで公演した時に、宮崎県立芸術劇場の佐藤前館長が聞きに来ていただいて、公演を見て、素晴らしいと。ぜひ宮崎でもやってもらえないだろうかということで、その次の公演、2年後でしたけど、「ラ・ボエム」という公演を延岡と宮崎ですることになりました。普通大都市からこういう公演が地方に流れてくるという、地方もやりやすよという形が多いんですけど、ここから県庁所在地に攻め入るという気持ちで、私たち気合を入れて頑張っていました。なかなかお客さんも入っていただいて、私たちもいい経験になりましたし自信にもつながった公演でした。

□水永

素晴らしいですね。延岡が宮崎に影響を与えたということだと思います。ありがとうございました。それでは続きまして、のべおか風と土の学校の代表理事でいらっしゃいます、江原さんの方をお願いしたいと思います。



□江原

皆さんこんにちは。「のべおか風と土の学校」を代表しています、江原と申します。今日はよろしく申し上げます。「のべおか風と土の学校」は25年前に縁がありまして、自然豊かな里山の地、上三輪で活動を始めました。上三輪ってどんなところっていう、全然ご存じない方も多いかと思うんですが、旧延岡市の一番西側の地域

で、北方町と隣接する小さな小さな集落です。そこで5人の母親で立ち上げました。そしてこの4月には、より多くの子どもの活動拠点になるようにと、施設の改装をしまして、再スタートをしたところです。次お願いします。私たちが発足当初から大切にしてきたことがあります。それは一つに、子どもたちにまず、自然と深く関わって遊んでほしい、その中で五感を鍛えたいということ、それから楽しい、心がワクワク揺れるような舞台演出文化との出会いを作ること、それと、異世代の人たちとの交流の中で、いろんなコミュニケーション力を高めて、将来、生きる力を豊かにつけてほしいという、自然と文化と人というキーワードを考えました。そして今日、それは本当に目まぐるしい社会の変化の中で、このテーマというのは、ますます輝きを増してきているんじゃないかというふうに感じているところです。次お願いします。私たちは子ども時代に たっぷりの現体験と、それから豊かな文化との出会いというのが必要だと感じているんですが、最初はですね、自然体験活動、稲作を中心にしていましたので、文化活動というのは9対1、1ぐらいの比率で、本当にささやかに近くにあるお寺さんの本堂で、小さな人形劇公演を年一回やるという活動から始まりました。そこから始まりまして、だんだんと文化芸術の分野に広がってきたんですが、今日はその芸術文化の活動が今どんなふうに広がってきたか、そして課題は何なのかというところを中心にお話をさせていただきたいと思っています。

その中で特に私たちが大事にしているのが、人形劇と音楽です。どちらも年一回、プロによる本

物の舞台芸術と出会うという機会をつくること、これは一番、年一回ですが大事にしているところです。それと日常的にもっと舞台芸術に触れられるように、地元で活動する人たちができたらいいなあ、人形劇も音楽もですが、身近なところで触れる、もっと日常的にしたいということがありまして、そのアマチュアの育成というのを大事にしてきました。これがちょうど15年前ぐらいから始まったことなんですけど、それまでは本当に自然活動が中心だったんですけども、15年前から一つは文化センター主催で ジュニア人形劇講座というのがありまして、そこを受けたことから始めて、人形劇では今7回目になる文化センターでの人形劇祭りを中心に活動してきています。2018年から始まったんですけど、毎年毎年お客様というか観客、親子の皆さんがここ文化センターに集まって、2日間のお祭りをしています。そして現在その活動を通して、3つのアマチュア人形劇グループが発足し、昨年もですね、保育園、幼稚園、それから高齢者クラブなど、それと児童クラブ、年10回の出前公演をするように今なってきています。それから音楽分野でもプロを迎えてのコンサートを中心にしているんですけど、その中でもっと身近に日常にと思いましたときに、プロと地元にいちゃる音楽家と一緒に作って作る室内楽コンサートというのを続けてきています。これはこの3月、今ちょうど出ているこの写真なんですけど、この3月野口遵記念館で、「みんなで輝く室内楽コンサート」というのをしました。延フィルの皆さん、それから地元音楽家の皆さん、そしてお迎えしたプロの音楽家たちと一緒にしたコンサートです。私たちはここで本当に子どもから大人までが舞台にアンコールで子どもたちと一緒に上がって歌ったりしたんですけど、心が本当に震えるという体験をさせていただきました。生の舞台芸術というのは、本当に演じる側と見る側が、すぐそこで生身の人間の魂をぶつけ合うというところに魅力があると思っているんですけども、演じる方々の魂に触れたときに、私たちは本当に心から笑ったり、悲しかったり、そして嬉しかったり、感動するという瞬間を味わうことができます。子どもたちもそれは同じことで、もっともっと子どもたちにその体験が広がっていくように、私たちは機会を作っていくことが大事なかなというふうに考えているところです。

今後の課題なんですけれども、すべての子どもたちにどうやってその機会を作っていくかということです。舞台芸術には多額の経費が必要で、特に劇団や音楽グループ、プロ集団というのは大都市に集中しているという現実があります。そのグループを延岡においていただくには、移動経費と宿泊費と、これで公演料やギャラと同じくらいの経費がかかってしまうという現実があるんですね。地方都市延岡で、私もここで育ちましたけれども、延岡で育ってもどこの地域で育っても子ども時代に最高の舞台に触れられたり、楽しい体験をしたり、心が踊る体験をして、夢が持てる、そういう子どもたちがたくさん育って、心豊かな大人が増えていく、そういう街になったらいいなあというふうに今思っているんですけど、そのためには、行政とか、企業さんとか市民グループ、私たちも含めて、まちぐるみで知恵を出し合っていく必要があるんじゃないかなという風に今思っているところです。まだまだこの課題は大きな壁になっています。

□水永

はい、ありがとうございました。只今、「人形劇まつり」のお話がありました。私はまだ拝見しておりませんが、人形劇の魅力というのは、どういうところにあるのでしょうか。

## □江原

人形劇はまずとても素朴なものです。子どもたちにとっては、小さな人形とか生き物、動物たちは本当に自分に近い存在で、大好きなものです。ですから子どもたちは人形劇って大好きだと思います。本当に子どもたちの多くを惹きつけております。そして人形劇は物語の面白さ、ストーリー性とか音楽ですね、それと美術、それと舞台の微妙な細かな仕掛け、そういった面白さもありまして、全てが活かされた総合芸術かなというふうに思っているんですけども、それともう一つの人形劇の面白さは、空を飛ぶことができるし、旅をすることができますし、海や川を潜って渡ったりとか、かなり舞台劇では表現できない幅広い世界、大きな世界を表現することができるんですね。子どもたちの大好きな動物たちもたくさん登場して表現できるということでは、子どもたちの心をワクワクかきたてる最高の表現方法かなと思ってまして、子どもたちの想像力、ワクワクする感性とか、そういったものを広げていくには、まず最初に子どもたちが会える舞台芸術として最適なという風に考えています。

## □水永

先ほどの写真で、子どもたちが乗り出すように目がキラキラしている写真がありましたですねあれを見て、我々大人も同じなんですね。またぜひ見に行きたいと思います。ありがとうございます。それでは続きまして、延岡市保育園協議会の会長で、方財保育園の園長でもいらっしゃいます甲斐さんの方からお願いしたいと思います。



## □甲斐

延岡市保育協議会の甲斐と申します。本日はよろしく申し上げます。延岡市保育協議会は、延岡市内の認可保育所保育園17施設、認定子ども園18施設、児童館7施設、児童クラブ16施設の計58施設からなる協議会となります。日頃より多岐にわたる職員研修を行い、教育・保育の質の向上や施設間での連携を行い、子どもたちに楽し

める空間と時間を、保護者には安心して安全な、そして子育てに関することを相談できる場所の提供を目指しています。

私からは、保育活動と文化芸術との関わりについてお話をさせていただきます。よく言われることですが、子どもとして、人間として心豊かにたくましく生きる力を身につけるためには、というところで、幼児期の人間形成の基礎が培われる重要な時期です。その時期に文化・芸術に出会うことは大切なことだと言われています。そのようなことから、私たちの日々の保育の活動の中で、子どもたちが音楽に合わせて歌ったり、楽器を弾いたり、また、本の読み聞かせや工作などの活動を重視していますが、例えば、誰か外部の方を呼んだり、お招きして演奏会を開くというような、本格的な文化活動についてはなかなか現実的に厳しい状況にあるのではないかと思います。当然お金もかかりますし、その施設の人員や時間的なもので厳しい状況にあると思っています。そのような中で、私たち保育協議会が、例年、この文化センターで「わいわいパーク」という催しを開催しております。この取り組みは毎年やっておりますが、平成6年から始まっていて、今年で32回目を迎えるわけです。昨年度はこの大ホールで、鈴木翼さんのファミリーコンサート、小ホールでは映写会、そして文化センター全体を使いまして、各園のブースでは滑り台やトランポリン、紙遊

びやくじ引き、駄菓子の販売やバザーなど、丸一日親子で楽しめる催しで、昨年度も大成功でした。ここで昨年度の様子をいくつかご覧いただきたいと思います。オープニングでは児童クラブの小学生に盛り上げていただきました。鈴木翼さんのコンサートでは、子どもたちも歌を歌い、体を動かし楽しく参加をさせていただきました。各保育園の様々な遊びのコーナーでは、遊具で遊んだり、親子で一緒に作ったり楽しむ姿が見られました。駐車場ではキッチンカーが並び賑わいを見せていました。このような取り組みは私たちの貴重な文化行事の一つになっていますが、先ほども申し上げたように、各保育園独自の文化活動がちょっと難しい面があると思っています。このような組織的な取り組みを増やしていくことはできないのかと思っています。昨年度ですが、のべおか文化事業団さんがこの大ホールで 幼児向けのコンサートを開いていただきました。大友剛さんのコンサートでしたが、内容も良くて、入場料も安く設定されていました。私たちもそのようなコンサートを共催で開催していくことはできないものかと思っています。大変申し訳ないのですが、費用の一部を出しますということではなくて、そのコンサートのPRなどにご協力できればと思っています。ホームページ、フェイスブック、インスタグラムなどのSNSも私たち保育協議会としてやっていますので、そちらの方のPR活動で私たちもお役に立てればなと思っています。コンサートの内容が前年の早い段階でわかれば、PR活動も広く活用できるのではないかと感じています。また、各保育園で園便りやICTを利用した保護者向けの情報を毎月発行していますので、その情報手段の活用などいろいろと保育協議会の方をうまく使っていただいて、その上で子どもたちがいろんな行事に参加できるようにしていただければなと思っていますので、何か耳よりな情報があれば、ぜひご協力をいたしますのでお願いしたいと思います。私からは以上です。

□水永

はい、ありがとうございました。わいわいワンパークではもう32回目を迎えられるということなんですけど、その企画とか準備とか大変なんだろうなと思いますけど、一番ご苦労されているようなことってどんなことでしょうか。

□甲斐

一番苦労というかですね、悩ましいのがこの大ホールや小ホールで行うコンテンツ、プログラムが一番悩んでいるところですね。どうしても子どもたちがどのように楽しめるか、どのように体を動かして一緒に見ているだけじゃなくて、少しでも笑顔多く親子と一緒に触れ合いながら楽しめるかっていうコンテンツの方がですね、毎年担当部と検討しているところで、あとはですね、この気候変動によって園の行事がちょっと時期がずれてきているところもありまして、この全園である行事の方も開催時期の方がちょっと悩ましいところではあります。運営面では各園の先生方、本当に献身的にですね、何よりも明るくパワフルに協力をいただいております。自分の園の子供たちじゃなくてですね、来園された子供たちにですね、いろんな気配りとかですね、見守り、配慮をいただいておりますので、私は特に心配とか危惧することはありませんので、このことは各園の保育園の先生方、保育者に感謝を申し上げたいところです。

□水永

毎年コンテンツを見直したり新しくされたりしてるんですね。本当に大変だと思いますけどぜひ続けてほしいなと思います。それで続きまして延岡市の小中学校の教頭会の会長でいらっしゃる、現在は延岡市東小学校の教頭をされています上米良さんの方からお願いしたいと思います。



#### □上米良

延岡市小中教頭会の会長の上米良です。本日は教頭会を代表しまして発言をさせていただきます。まず小中学校での文化的な活動の紹介なんですけども、小中学校合わせて40校以上ありますので、全てを紹介するとちょっと時間が足りませんので、いくつか掻い摘まんで説明させていただきます。これは小中学校の例なんですけども

響座による橘太鼓の鑑賞教室の様子です。聴くだけでなく、児童生徒代表や先生の代表によるコラボレーションもあったと聞いております。続きまして北川中学校です。延岡出身の落語家の桂銀次さんによる落語の公演会をしたということです。いろんな道具の説明等もあってとても興味深かったと聞いております。続いて一ヶ岡小学校は同じく桂銀次さんの落語公演会、それから大阪市音楽団の演奏による音楽鑑賞教室を行ったということです。音楽鑑賞教室では児童も参加できる参加型のイベントも行ったということです。浦城小学校では全校児童による学習発表会を行ったということです。卒業した中学生も飛び入りで参加してくれたそうです。岡富小学校では落語家の立川志ららさんによる落語公演会を実施したと聞いております。続きまして三河内小中学校ですね。能楽の鑑賞教室を行ったということです。これも体験型のプログラムがあって発声法や構えなどを体験したと聞いております。続いて緑ヶ丘小学校は演奏者の方と児童たちとの音楽コラボレーションを行って保護者や地域の方にも見ていただいたということです。また音楽鑑賞教室ではラテン音楽の鑑賞を行って代表児童による参加も行ったということです。続いて最後東小学校なんですけど、昨年度は県警音楽隊による演奏やカラーガード隊による演技などを、あと宮崎県の読書アンバサダーの米良美一さんにお越しいただいて、読み聞かせや歌を聞かせていただきました。あとちょっとスライドにはないんですけども延岡市の小学校は5年生がこちらの文化センターの方で毎年5年生が招待されて劇団四季の公演を鑑賞するというのがあります。これも教育委員会の方に動いていただいて実現できています。では課題なんですけども 2つあるんですけども、いろいろな鑑賞教室と体験をさせているんですけども、学校現場としては費用の問題がまずあります。保護者の負担を減らすために近くの学校と合同で行ったり、文化庁、日本芸術振興協会などの補助事業を活用したりして無料で来てくださる団体を探してお願いしています。そういう団体を探していくのが難しくて学校の担当者というのはそういうのに頭を悩ませています。あと時間的问题があります。学校外で例えばこちらに来て公演鑑賞になりますと移動をしなきゃいけない、そうすると往復の時間プラス公演の鑑賞ということで例えば2時間の公演を鑑賞するのであれば、ある意味難しいなという問題があります。文化活動への寄与という点では、学校は子どもたちや保護者の皆さんに情報を発信しやすい立場です。教育委員会に話を通していただければチラシを配布したりとかあるいはメール配信等でイベントを周知することができますので、そういう点では文化活動に寄与できる、子どもたちあるいは保護者の皆さんにアプローチできます。以上です。

#### □水永

ありがとうございました。最近では学校に対して家庭とか地域から様々な期待が寄せられているので、先生方も本当に大変ご苦労されていると思うんですけど、様々な文化団体とか地域の方々が学校に来ていただいて寄与されているんですけど、その辺で工夫をされてよかったこととか何かありま

したらちょっと紹介していただけますか。

□上米良

そうですね、先ほどではちょっと紹介できていないんですけど、地域の方に体育を教えていただいてそれを運動会で披露したりとか、あるいは茶道体験を行って学習発表会で保護者の皆さんにお手前を披露したりとか、そういう活動をしたということも聞いています。そういう話を聞くと地域の方にもいろんな文化活動に協力いただける方がいらっしゃって、また先ほどの甲斐先生や皆様の話も聞いていると、地域にもいろんな人材がいらっしゃるのかなと、そこがなかなか学校に届いてきていないのかな、その辺のマッチングというか、その辺がうまくいっていないような気はします。

以上です。

□水永

はい、ありがとうございました。これから地域と色々な団体の力を借りて、子どもたちに少しでもこの文化芸術に触れさせていく、そういう機会が増えていくといいんだろうなと思いました。それで最後になりますけれども、のべおか文化事業団の事務局長をしていらっしゃいます青井さんの方をお願いしたいと思います。

□青井



只今ご紹介いただきました私ども公益財団法人のべおか文化事業団では、延岡市の指定管理者としてこの延岡総合文化センターと野口遵記念館の2施設の管理を行っております。私どもの大事な仕事といえば、大きな括りであれば、1つが施設の貸出業務、もう1つが自主企画事業の実施でございます。当然貸出業務ではお分かりでしょうけれども、

ここ文化センターにも大ホールとか小ホールとか、いろんな会議室がございます。それを市民の皆様にご利用いただくための業務ということです。一方、自主企画事業というのは、私たち指定管理者が深く関わって取り組む公演等ということになります。今現在、本年度も40件ほど事業をやるんですけども、文化センターと野口遵記念館で毎年そういった自主企画事業を行っておりまして、これらの施設での大切な催しというか取り組みの1つになっております。引いては本市の文化振興というんでしょうか、そういった部分にもある程度貢献しているのではないかという風に思っています。それでこのようなことから私どもはこの両施設を運営をするにあたって、運営指針である管理運営計画というのを立てております。今画面をお出ししていますけれども、見づらいたろうとは思いますが、こういったものをお示ししています。これは文化センターもしくは野口遵記念館のホームページに掲載をいたしておりますので、後ほどご確認をいただければという風に思いますが、まずですね、文化センターと野口遵記念館が文化の拠点施設となるためにはこういった機能の充実が求められるのかといったところに着目をいたしまして、私たちとしてはその運営目標として5つの拠点機能を挙げています。鑑賞拠点、活動拠点、育成拠点、交流拠点、情報拠点 この5つの拠点機能でございます。そしてその運営目標の達成に向けて管理運営の面と事業実施の両面から取り組んでいるところですが、事業実施におきましては、そこにお示ししていますように文化芸術の鑑賞機会の提供と普及啓発など5つの視点を掲げております。ちなみに本年度にこういった事業をやっているかということでちょっとご紹介いたします。全体的には43事業に取り組みます。まず1番

目の文化芸術の鑑賞機会の提供と普及啓発についてはドラムタオなど15事業ございます。次に2番目の文化芸術活動への支援という点については第39回のべおか第九演奏会など10事業を行います。それから3番目の文化芸術に係る人材育成についてはらんま先生とエコ実験など7事業取り組みます。そして4番目の文化芸術等に関する交流連携では雑貨 Day のぐちなど5事業。そして最後に5番目の文化芸術等に関する情報発信では避難体験防災イベントなど6事業に取り組んでまいります。なおこれらの事業につきましては関係団体の代表者で構成されている自主文化事業懇談会というものがございまして、その中でご意見やご提案をいただきながら企画したものでございます。ところで只今お話した自主文化事業を行う上での課題でございますけれども、これにつきましてはやはり何より悩ましいのが集客対策でございます。ご案内のとおり公演にかかる費用というのは入場料収入で主に賄うわけですが、思ったとおり入場者がなくて赤字を出してしまうというのでしょうか、そういったことが頻繁に出ております。また私ども公益財団法人というのは、財団認可の条件としてできるだけ利用者目線といいますか、そういったことで入場料は安く設定しなさいというのが条件になっております。このためにだいたいもともと私たちが行う公演というのは、赤字のリスクを抱えた取り組みというのが正直言って多くなっております。このようにどのような公演を行うにしても、集客対策というのは必要不可欠ですので、この集客対策には今後より積極的に新たな対応を検討していきたいと思っております。それから私どもが企画する中で、子どもさん向けの企画というのも結構あるのですが、この点についても集客面がやはり思ったような結果が得られておりません。このことについては、例えばですけれども親子の招待枠を設けるとか、こういった形で積極的にアプローチしていきたいという風に考えているところでございます。以上です。



## テーマ②

### <地域社会や学校などで起きている社会的な問題をどう考えるか>

□水永

ありがとうございました。6人の方々にそれぞれの現状と課題を語っていただいたのですが、延岡市の中でこれだけ幅広くですね、この文化活動に取り組んでいただいている団体、方々がいらっしゃるんだなということを改めて感じていただけたと思うのですが、次のテーマとして、お話の中にも何回も出てきたのですが、最近の日本社会というのが変わってきたんじゃないか、子どもたちを取り巻く家庭とか学校とか地域の環境が変わってきたんじゃないか、それが5年前のコロナ禍によってさらに進んだんじゃないか、こういうような指摘がありました。どんな風に変わってきたかという、今のお話を聞きながら、人と人との関わりが薄くなってきたんじゃないか、こういうような指摘がありました。これからの延岡の文化活動を考えるにあたって、そのこのとこ

ろを少し掘り下げて考えていってみたいと思うんですね。

最初に風と土の学校を 25 年続けておられます江原さんがそのあたりについてどんな風に感じていらっしゃるかというのをお話いただけますでしょうか。

#### □江原

今子どもたちの環境って本当に 25 年、特に 30 年、40 年前からだと思うんですが大きく変わってきたと思っています。まず子どもたちの前に大人たちが大変忙しくなっていて、それに合わせて子どもたちも大変忙しい毎日を送って、心にゆとりがない日常になっている現実があるかと思います。まず一つ目には家庭です。家庭生活で大人たちが忙しすぎて、ゆっくり子どもの話を聞いたりとか、お話をしたりとか、一緒に食事をしたりとか、まともにくつろいだりとか、そんな楽しい時間や親子関係というのがだんだん薄くなってきていて、今だんだん家庭でのだんだんという言葉はもう死語になりつつあるのではないかと風を感じています。それから学校です。学力向上ということで、そこにとても重きが置かれてきているということと、コロナもあるかと思いますが、それも含めて遊びとか文化とかその時間が本当に少なくなっていると思っています。学校の中で仲間とぶつかったり、それから支え合ったりという、人と人が力を合わせ、友達でよかったなど、人っていいなって感じるようなそういう絆を結ぶというそういう場が学校の中になくなりつつある、弱くなってきているんじゃないかという風にも感じています。それから地域です。子どもたちが今、放課後という時間がかつて 40 年前ぐらいというのはまだ放課後ゆっくり子どもたちは地域で遊ぶという姿が見られました。異年齢の子どもの中で上の子から学んだり悪いことも教わったりやらされたりいろんなことで社会のルールを学んでいくという場所、それから大人が介在しないで子どもだけの世界というのがとても貴重だったと思うんですけれども、その子どもだけの自由な世界というのが今ほぼなくなりつつありまして、この中で学び合いというのが支え合うという子ども同士の育ちの場というのが今なくなってきたということも大きな変化だと思っています。今放課後に塾やお稽古、スポーツクラブなどで時間に追われながらあちこち地域で公園とか家の近所でとか遊ぶ子どもたちの姿というのは本当に見られなくなってきたのではないかと風に思っています、このように子どもたちがぶつかり合い人間力を高めて生きる力を育てるという元々の土台が学校・地域・家庭どの場でも弱くなっていると感じています。

#### □水永

ありがとうございました。先ほどのお話の中で 大学で音楽を学ぶ生徒が少なくなっているという話もあったんですけれども、後藤さんはどんな風に感じていらっしゃいますか。

#### □後藤

今学校での音楽の授業って、私たちが学生だった頃からすると多分半分くらいになっているんですね。私たちが学んだ学校で週に 2 回くらいは音楽授業があったと思います。今 1 回くらいになっていると思いますし、それに伴って当然音楽の先生も必要なくなるので減ってきていると



思います。昔は学校でも盛んだった結構小学校とかに合唱クラブとかあって結構みんな歌ったりして私たちはそんな感じで育ってきたんですけども今ほとんどないです。小学校に合唱のクラブがあるところはほぼないんじゃないかと思います。さらにそういう風になくなってきた上にコロナ禍で歌を歌うことがものすごく制限されました。音楽の授業すら声も出せない。音楽を聴くしかできない。リコーダーもダメだったじゃないかな。鍵盤ハーモニカで息を入れてするあれもダメだったと思います。でもだんだんそうになってきている。コロナ禍はおさまったというか安定した中で、でもなかなか復活していないんじゃないかなと思います。毎月あった学校での月の歌とか毎月歌うという感じがだんだん減って学校で歌うのも少なくなっていると思います。そういうのもあって、だんだんですけど音楽を大学で学ぶ生徒も減ってきていますよね。ちょっと話はスポーツに関してなんですけど、私はアメリカで育った方から聞いたんですけど、日本ではサッカーとか野球とかをずっと小さいころからずっと極めていくという形の子が結構多いと思うんですけど、アメリカではいろんなスポーツをみんな満遍なく体験してそれから選んでいく形だよって言われたことがあってなるほどなと思って、だから芸術文化に関しても子供の時にいろんな経験をすること、いろんなものに触れるということはすごく大事なことじゃないかなと思います。ただ家庭でコンサートに行くとかいうのももちろん積極的にコンサートで子供を連れて行く家庭とかもあると思うんですけど家庭によってもものすごく差があると思います。なので平等に体験できる場って学校だと思うんですよ、私たちのスクールコンサートをPRする訳じゃないですけど、スクールコンサートに行ったら生の声を届ける、音楽好きな子も嫌いな子も平等にそういうのに触れることができるっていう機会ってすごく大事じゃないかなと思っていて、音楽の授業がただでさえ減っているのでもそういう機会を学校は頑張って作っていただくと、積極的に取り入れていただきたいなと思います。以上です。

#### □水永

確かに学校に対する期待っていうのはどんどん大きくなってきてるっていう感じがしますよね。学習指導要領も改定されたりしてきてますし、学校の中でさまざまなことをやらないといけないっていうそういうのがあるんですけど、さまざまなご苦労もなさっていると思いますし、そういう学校の中での変化とそれから実際に子どもたちをご覧になっていて、子どもたちの変化とそのあたりで、上米良さん何か感じてらっしゃることがありましたらお願いします。

#### □上米良

はい。確かに学校では10年くらい前までは確かに朝の会で月の歌とか歌っていたと思いますし、ただ最近はあまり聞かないですね。図工や音楽の時間は先ほど後藤さんが半分っておっしゃいましたが、ちょっと私もどれくらい少なくなったのかなと思っていたのでちょっと調べてみました。

まずこれは昭和33年からのグラフなんですけど、昭和33年当時は小学校では図工や音楽に6年間で405時間与えられていました。ところが10年ごとの学習指導要領の改定に伴って現在では360時間くらいまで減少しています。中学校でも美術や音楽は以前は3年間で175時間ありましたが、今では115時間に減少して、授業全体に占める割合が5%から3%へと落ち込んでいることが分かりました。さらにコロナ禍を経て日常的に歌う機会や皆で集まって表現する活動が軒並み制限されて、やむなく中止された行事とか習慣の中で未だに再開されてい



ないものも少なくないと思います。ただ音楽の時間の演奏とか鍵盤ハーモニカ、リコーダーも含めてそういうのはほぼ復活はしてきていると思っております。次お願いします。ちょっとグラフが見にくくて申し訳ありません。子どもたちの課題についてなんですけれども、こちらは子ども家庭庁の調査結果なんです、趣味や娯楽にインターネットを利用している時間は、学習やコミュニケーション目的と比べても明らかに長時間化しています。というのがこのオビグラフの下から3番目のところに赤い部分がかかなり多いと思うんですけれども、この辺りが平日にインターネットを利用している、例えば趣味や娯楽にインターネットを利用している時間というのはかなり長時間に渡っています。これから分かるように子どもたちの生活にはデジタルメディアが深く入り込んで受動的な画面視聴の時間が増えているということが課題かなと思います。こうした変化で集中力や感情の安定、自己肯定感の低下などで育ちに影響を与えている可能性があると言われてしています。実際学校現場でも落ち着きのない子どもとか感情の起伏が激しい子どもとかそういうケースが見られる、ケースが増えていると感じています。文化活動では自分を表現する力や人と協力する力、感性や共感力といった生きる力の土台が育まれます。だから文化活動の価値を再認識して、学校教育の中でその時間と機会を確保する必要があると思います。

以上です。

#### □水永

ありがとうございます。幼稚園や保育所においても保護者の方々の意見とか考えが変わってきたということを聞いたりするんですけど、実際に幼稚園や保育所で子どもたち保護者の方をご覧になって、その感じていらっしゃることを甲斐さんはいかがでしょう。

#### □甲斐

今大人も子どもも忙しく慌ただしい時間を過ごす中で、どうしても親が家事で手を離せないときに子どもにYouTubeとかそういうものの動画を見せて、ちょっと子守り代わりに使ったりだとか、あとはもう夜遅くまでそういうものを見る子どもがどんどん増えてきているなというように実感をしているところです。また親も一緒にスマホとかから目が離せなくなって親と子どもが一緒に寝不足で保育園に来るとか、朝の活動がままならないというような場面も多くあります。あと親の意識の変化というか、子育て力の低下ということですね、普通今までがご家庭で教えてきた生活習慣だとか躾というところが、それを保育施設や教育施設でやらなければならなくなってきたというかですね、例えばパンツトレーニングだとかですね、あとは箸の使い方、スプーンで食べさせることから始めるんですけど、こういう持ち方、そこから保育園の方から教えていったりだとかいうところがどうしてもですね、多くなっているというのが、けどこれはですね、今までおじいちゃんおばあちゃんとかですね、親子3世代で住んできたものとかですね、向こう三軒両隣とかおっしゃってたと思いますが、地域での子育てをうまくやってきたから、そういうご家庭で学ぶ機会というのがたくさんあったんじゃないかなと、けど時代が変化してですね、両親保護者だけでそれを担わなければいけないというところで、親自身が子育てに悩むというところは非常に大きくあるんじゃないかなというところで、私たちでもですね、子育て支援とかですね、親保護者支援というのが大事な時代になってきたんじゃないかと思っています。



□水永

只今、小学校や幼稚園・保育所での変化というのを今感じていらっしゃることを聞いたんですけど、地域でもですね、高齢化が進んでいますし、人口減少が非常に激しく進んでいます。そういう文化団体をご覧になっていて、特に何か変化を感じていらっしゃる、谷口さん何かありますでしょうか。

□谷口

はい、今まで何名の方がおっしゃった通りの現象は大人の世界でもあるのかなと思っております。冒頭で文化連盟に所属している団体の中での子供の数が間違いなく減少してきている、これは延岡市全体で見ると、少子化現象で単純に子がいなくなっているだけではなくて、人口減少の問題も当然無視できないところではあると思います。ただそれだけの理由ではなくて、子供がやってみたいという体験を今甲斐さんのおっしゃられたように保護者が意識の中にあるかどうかというのも非常に大きな問題であるようにも思います。一概にこれだけだという理由はないと思うんですけど、今ちょうど60歳定年が65歳定年に移行している時期もあり、今までだったらもう一緒にやろうと言ってたら一緒にやれた世代が先送りされる状況が今発生しているのと、コロナもあってやっぱり体験の機会がリセットされていないままで、別にやらないんじゃないかとやりたいと思う機会がなくなっているという現状が文化連盟の団体の数の状況を見ても垣間見れるかなと思っております。

□水永

ありがとうございます。今いろいろ立場で紹介いただいたんですけども、やはり日本の社会の変化の中で人と人との関わりが薄くなってきている、このような中で文化活動が果たしていくべき役割みたいなものが、今までとまた違って大事になってきたんじゃないかというご意見だと思うんですけど、今、文化センターでは自主文化事業ということでたくさんの事業をやっているんですけど、その辺りについて、そういった社会の変化に対して文化活動がどんな役割が果たしていけるのかという辺りについて、青井さん、ちょっと難しい話になりますけど、どんな風にお考えになりますか。

□青井

只今、皆さんからいろいろなお話を伺っていて、今、子どもたちを取り巻く環境というか、その中の課題というのは、確かに私も感じるものが多々ございました。ただですね、どの課題も何かちょっと根深いものがあって、一朝一夕に解消できるような課題や問題でもないような気もしています。それで私たちとしては、そういった課題はあるんだけど、そのような中で子どもたちに文化芸術に触れる機会をどういう風に充実するとか、またどのようなお手伝いができるんだろうかとか、そういった事を一緒に考えて、そして実践していくということが大事なかなと思います。それからもう一点ですね、文化芸術の必要性というのがですね、例えばですけど、感性や表現力とか、想像力とかコミュニケーション能力を高めるんだということが、書物でもいろんなところで言われているんですけど、今一つ実感として感じえないというか、皆さんもそのように感じているのではないかなと思うんですね。私としてはやっぱり、具体的にですね、こういう文化活動に触れて子どもたちがこう変わったんだというような事例等もあればですね、その文化芸術の必要性に対する認識というのがさらに高まるんじゃないかなという風に思っているところです。 以上です。

## □水永

子どもたちがどう変わってきたかということだけでなく、これが高齢化社会ですから、我々シニアにとっても高齢者にとってもそういう文化活動がどんな影響があるのかって非常に大きいと思うんですね。それが具体的に見える化できるか、そういうのがいいんじゃないかという気がいたします。今のご意見の通りです。そういう意味で、この文化活動に触れることによって子どもたちが、あるいは大人がどんな風になんか変わってきたかという具体的な事例をですね、できれば紹介をしていたらと思うんですけど、最初に風と土の学校で25年間いろんな形で文化活動に関わってきたという江原さんから何かそういう具体的な事例、こう変わっていったみたいな事例がありましたら紹介いただけますでしょうか。

## □江原

今青井さんから大きなテーマを投げられたような感じがしますけれども、文化活動、心の問題でどう成長してきたかとか、人間がどう変化してきたかって本当に測りづらいところがあるんですが、今子どもたちが楽しい子ども時代を送っていくっていうことを取り戻していく、先ほど社会の変化を3つすごく重たいことを述べましたけれども、やっぱり取り戻していくためには遊びと文化がこれからもっともっと役割を果たしていくだろうという風に、それでちょっとそこに重たいのですが、私たちが今まで活動していきまして、見えてきた感じしているところをちょっとだけ述べさせていただきます。まずですね、風と土の学校に集まって来られた親子さんというのは、ほとんどが自然体験をして子どもたちをたくましく育てたいというような、そういう願いを持った方がほとんどで、生の音楽とか人形劇に関心があるとか、それから子どもの時とか見てたとか触れたとか、そういう方っていうのはほとんどない状況なんですね。そこから集まって見えて、そこで初めて親も子も私たちの活動の中で生の舞台芸術に触れるというようなスタートだったんです。そんな中で子どもたちも含めて人形劇は大人がまず感動や楽しむようになってきて、大きな変化が起こりつつあるという風に思っております。子どもはですね、子どもたちはまず森で遊んだり川で遊んだり泥んこになったり大好きです。それと同じくらい今人形劇見たり音楽も触れたり、そういうことが好きになってきています。集まってきている子どもたちは遊びから入って、この舞台芸術というちょっとハードルの高い分野がやっぱり楽しいと感じるように今なっています。好きっていう感覚が生まれております。音楽に対しては特に苦手意識が大人の方が強い中で、クラシック音楽というのも親子共に楽しめるようになって、例えば演奏する人たちへの憧れですとか、そういったのも生まれてきています。今中学生に育ってきた子どもたちで、なぜか吹奏楽に流れていく子どもたちが今増えてまして、そしてその中には将来、本当にこの子は譜面も読めない楽譜も読めないような子どもさんだったんですが、演奏するフルートの先生に憧れてフルートをやりたい、そして吹奏楽に入って、その音楽の道を目指したいということで今高校生生活を頑張ってスタートしたという子どもさんも生まれてきました。それとか今中学生なんですけど、中学生って大変厳しい人間関係、ちょっと弱かったり、ちょっと変わっているとか個性が強かったりするととてもいじめられる対象になりがちなんですけど、そんな現実の世界の中で、この音楽とかがとてもその支えになっていて、私たちは音楽文化が子どもたちにとって生きる力、支えになるんだな、なっているんだなというのを強く感じています。それは子どもに今現れている現象で感じていることです。二つ目には大人の問題です。大人です。これまで縁が全くなかった私も含めて、音楽とか人形劇の世界に触れて心がときめいて、いつしか自分もやりたいと思うよ

うな、自分も楽器を吹いてみたいとか、あんな風に演奏してみたいとか、人形劇をやってみみたいとか、子どもの前で喜ばせてあげたいとか、そういう風に思う人たちが今増えつつあるんですね。人形劇では今三つのアマチュアグループが生まれて、先ほども申し上げましたけれども各地で大変いろんな方に喜ばれております。そして音楽なんですけど、今音楽ではまたどんどんどんどん変化が起こってまして、フルートですとか合唱、それからリコーダーですとか、五つの音楽サークル、グループが生まれて、自分たちで楽しい音楽会をやったり、そういったことで音楽が日常の生活の中に根付き始めた、楽しむ人たちが広がっているという現象が起こってまして、そこが生活を楽しむ、文化を楽しむ、生活の中に音楽があるというのが楽しいなと思う人たちが今広がっております。このようにして今、風と土の学校では自然体験、稲作以外の文化活動というのがなくては活動が語れないぐらいまでになってまして、この分野が大人も子どもも含めまして夢と希望を膨らませてくれたり、人と人の心をつないだり、それから心を豊かにしてくれて、生きる生活の活力源、活力の源になっているということを今実感しています。全然青井さんのご質問にお答えできませんでしたが。

□水永

よくわかります。非常にインパクトのあるお話だったと思います。子どもたちだけではなくて大人も変わっていくというお話をいただきました。幼稚園とか保育所で見ておられます甲斐さんの方で文化活動に触れることによって子どもたちが変わっていったという具体的な例がありましたらご紹介いただけますか。

□甲斐

人と人との関わりが薄くなってきた社会の変化の中で、文化活動に触れることによって子どもたちが変わっていけるのではないかというご意見ですね。文化活動は子どもたちの心身の健全な発達を促し社会性を育む上で非常に大きな力を持っていると思います。事例というより私たちの考え方なんですけど、文化活動は一方的な教えではなくて子どもたちが自発的に関わっている。その中で他者との関係性を築いていくためのきっかけづくりになっていくんじゃないかなと。特に共同性、共感、自己表現と地域との連携といった力を育む場として現代社会における人と人とのつながりを再生するのに重要な手段として 私たちは期待するとともに、子どもたちがさまざまな文化活動に触れることで多様な感覚を学んだり、他者を理解し協力しながら物事を進めていく力を身につけることができるという、このことにより社会の中でより豊かな人間性を、人間関係を築き生きていくための土台が培われていくのではないかなと私たちは考えています。事例ということではなくて申し訳ありません。

□水永

ありがとうございます。学校の方で子どもたちを見ていらっしゃる上米良さんは何かそのあたり具体的に感じられたことってございますでしょうか。

□上米良

具体的な事例ですか。例えば、うちの学校の例でいうと、昨年の米良さんが来て話をしてくれたという話はしたんですけども、その読書講演会という名目だったので、読書に関する読み聞かせだったりとか本人に関わる話とかしてもらってたんですけど、お話をしているときって、子どもたちって割とちゃんと聞いている子もいるんですけど、どうしてもふざけたりとかざわざわしたりとか、落ち着きがない子どももいるんですよ。授業中でもそうなんですけど、静かにしなさいって注意したりし

て、それが日常的な風景なんですけど、米良さんが最後に「もののけ姫」を歌ってくださったんですよ、そうすると、静かにしなさいって言うてないのに、さっき後藤さんたちが歌ったような感じで、シーンとしてるんですよね。それは迫力もそうですし、生の音というか、そういうものが子どもたちの心をとらえたんじゃないかなというのを、今思えば、そういう体験ってすごいんだなって思って、そういう体験を大人になっても忘れないんじゃないかなって思いますし、子どもの頃自分もあるだろうし、落ち着くっていう体験を子どもたちが自ら学んだということにもつながると思うんですけど、そういうことを通じて子どもたちって大きく変わっていくんじゃないかなって思います。

□水永

ありがとうございました。この文化活動に触れることによって、子どもたちだけでなく、大人がどんな風が変わっていくのかって話をそれぞれご紹介いただいたんですけど、青井さん、お聞きになっていかがでしょうか。

□青井

私は現場にいないから、具体的な例というのはお話できないんですけど、一つですね、統計データというのをご紹介したいと思います。文化庁の文化に関する世論調査というのがございます。これ毎年文化庁が実施しているものなんですけど、この上の方に書いておりますように、子どもの頃に習い事の経験がある人は、そうでない人に比べて、大人になった時に文化公演等の鑑賞率が高い、それから文化芸術活動の行動比率が高いという分析結果が出ております。中ほどに棒グラフがございんですけど、これちょっと見にくい資料になっているとは思いますが、具体的に数値を申し上げますと鑑賞率の点では、何もしていない子どもが28.32%に対して、楽器経験者になると48.8%、それからダンス経験者はさらに高く63.23%、絵画の経験者は53.39%というデータになっています。一方行動比率ですね。これについては何もしていない子どもが5.38%に対して、楽器経験者だと14.1、ダンスが33%くらい、そして絵画経験者が22%くらい。非常に大きな数字になっています。このような統計データからも文化芸術が子どもに与える影響というのでしょうか、そういったものが読み取れるんじゃないかなということで、ちょっとご紹介させていただきました。



### テーマ③

＜次世代を担う子供たちに、文化に触れる機会をどう充実させていけばいいか＞

□水永

ありがとうございました。これまで社会や環境がずいぶん変わってきたんじゃないかという話をいただいて、その中でこの文化活動が占める役割みたいなものも、時代とともに非常に大きくなってきているんじゃないかということを今お話を聞きながら感じさせていただきました。

そういったことを踏まえて、最後になりますけど、これからこの文化活動にどういう風に取り組んでいけばいいのか、特に次世代の子どもたちにどう伝えていけばいいのか、そういったあたりをこれからそれぞれ最後にお一人ずつお話をしていただきたいと思います。最初に後藤さんのほうからお願いしてよろしいですか。



#### □後藤

子ども達の文化芸術に触れる機会が必要という話がたくさん出ていると思うんですけども、私どもオペラの会では、学校に出向いてのスクールコンサートを行っています。実際学校に行って演奏をして、子どもから感想文とかもらうんですけど、初めて生の歌声を聞いたとか、びっくりした、すごかったって、みんな書いてくれます。やっぱりなかなか生の声を聞く機会ってないんですね、子どもたちには、もう今は、特に YouTube とかテレビとか、もうそっちからのものばかりで、あと興味があるのを調べればどんどんそれが入ってきますので、もうそっち系しか来ないんですけど、やっぱり先ほど言ったように、学校みんな平等で体験できる場に実際出向いて歌うと、すごく子どもたちが感動してくれます。実際先ほど着たようなキラキラのドレスとか、そんなの着ていくので、見た感じもわーってなります、子どもたち。そういう体験ですごく喜んでくれます。それとあと発声指導も行ったらします。どうしたらいい声が出るかっていう、発声指導もコンサートの中で入れたりしてるんですけど、そういう体験をして最後にみんなで歌うっていうスクールコンサートにしています。そういう形で音楽、歌声とかに触れる機会をこれからも届けていきたいと思いますので、ぜひ学校関係者の方のご協力をいただきたいなと思います。それとあとオペラは公演しますけれども、そういう演奏会とか公演をやるときに学生に招待券をちょっと配布したりして、ただ招待券もらえるなら行ってみようかなという形で来てもらおうとかですね。あとオペラに関しては本番前のバックステージツアーみたいなのもやります。演出家が自ら本番前、私たちメイクとかしたり衣装がかけている部屋とか、こういうセットを組んで準備が進んでいるところを見ていくような、そういうツアーも企画したいと思っています。演目によっては子どもたちにオペラに出てもらおうという体験も、体験というかそういう出演の募集もすることもあります。第九を歌う会としても小学生、中学生、高校生の学生の出演者、参加者を増やしていきたいと。一緒に第九を歌ってこの先にずっとつなげていきたいという風に思っております。大学の方も招待券とかでそういう触れる機会を増やしていきたいと思っています。以上です。

#### □水永

ありがとうございます。それでは江原さんお願いいたします。

#### □江原

子どもたちが本当に新しい世界と出会うということは、本当に子どもたちの成長にとって大きな栄養源になると思いますし、未来を本当に開いていくためには、希望を持って生きるためには、どうしてもこの文化というのが大事だという風に考えているのですが、そのためにこれから先、何をしていくのか、何が大事かって思いましたときに、全ての子どもたちにそういう場を、機会を、ということが一番私は強く思っています。そのために幼稚園、保育園、学校、教育機関との連携ということで、いろんな団体と教育機関、いろんな会員ですけれども、いろんな団体で連携をしながらやっていくと

ということが、一番これから大きな鍵になるのではないかなと。私たちとしては、1点目にアマチュアの人形劇ですとか、プロの音楽家と地元の音楽家と一緒に作ったコンサート、そういう気軽に、まず経費をかけないで生の舞台芸術に触れるという、そういう企画を提案していくというのが一つです。それから2点目に、やはりプロの本物の舞台芸術に触れる機会というのも、やはり大事だと思っていますので、その際の移動費用とか宿泊費とか、そういったものを軽減するために、まとまって延岡にお呼びして、1週間、1ヶ月余りだと思いますが、1週間くらい連続してあちこちで公演ができるとか、そういったことの企画の提案をさせていただけたらという風に思っているところです。それからもう一つ、これからのことで大きなことですが、生の舞台芸術にかかる経費をどう軽くしていくか、この地方都市延岡でも子どもたちに触れる機会をどう作るかということでは、どうしても財源を安定的に作っていくということが大事かと思うんですね。そのためには、今すぐには難しいかもしれないけれども、街の企業さんですとか延岡市からも、みんなで知恵を出し合って、この延岡の子どもたちはみんなで育てるといような街づくりを目指して、長期的に検討していくということをやってみてはどうかと、その一歩が踏み出せたらと思っています。子どもたちが豊かに育つというのは、本当に街が将来豊かになっていくということにつながっていくと思っています。そして、子どもが育つことと文化が根付くというのは、やはりどちらも時間がとてもかかって、年月もかかることだという風に思いますので、粘り強くみなさんと一緒に力を合わせて、今後そのことに継続した活動をどうしていくかということが、私たちにとってはとても大事なことかという風に考えているところです。

□水永

はい、ありがとうございました。それでは次に、甲斐さんお願いいたします。



□甲斐

はい、子どもたち、私たちが預かっている子どもたちもなんですが、ご家庭でもなんですけど、子どもたちというのが、ごっこ遊びとかですね、劇遊びや歌遊び、まねっこ遊びというですね、いつの時代でも演じたり歌ったりということに夢中になって遊んでいるのかなというのを感じています。それで、そうした文化とか芸能とかという活動

といったものの中でですね、本来なら老いも子どもだからとかですね、老いも若いもなく、毎日を営むことで生きることとは何か不可分のものが潜んでいるように思います。それで、そんな中でですね、子どもたちには是非本物を見てもらいたいなと、YouTubeではなくて本物を見て感じるものが今の時代必要じゃないかなという風に思います。それで、本物を見ることでその場の雰囲気とかですね、息遣いとかを実感して、将来的にはそこに憧れて夢を抱いたり、ごっこ遊びから将来の目標と夢へ変わっていくのではないかなという風には思っています。今、こういう場を設けさせていただいて、是非、保育協議会とですね、後藤さん、江原さん、文化財団さんとかですね、いろんなところで未就学児の施設でも子どもたちいろいろできますので、見たり聞いたりもしっかりできて、そこからの真似っ子で子どもたちが将来夢を描くようなところまで持っていきたいなと思いますので、是非、そういうところで皆様とコラボレーションというかですね、一緒にやっていければ楽しい延岡になるんじゃないかなと思います。よろしくお願いします。

□水永

確かに今お話しいただいた子どもたちは本物を見るとですね、YouTubeとかテレビとかじゃなくて本物を見るとそれをごっこ遊びにするんですね。それを本物に似たような遊びをするという、そういう風になっていくと、子どもたち自分のことになっていくということなんですね。幼稚園なんかではそういうごっこ遊びをしている子たちもいるということなんですね。よくわかりました。ありがとうございます。それでは上米良さん、お願いいたします。

□上米良

はい。後藤さんや江原さんがお話ししていただいたように、地域社会の方々が子どもたちに芸術文化に触れる機会をつくっていただいているということすごくありがたいと思います。感謝申し上げます。学校教育での芸術文化活動の必要性というのももちろん十分に私たちも認識しておりますし、子どもたちにそのような体験を積ませたいというのは、どうにかしてやりたいというのはもちろんそうなんですけれども、学校だけでやろうとするとどうしても費用とか時間の問題とか、いろんな課題があって限界があります。この場にいらっしゃる方々にお願いにはなるんですけれども、小中学校に来ていただいて出前公演をしていただけるとすごくありがたいなという風に思います。子どもたちにとっても移動の問題ありませんし、内容を学校の規模と調整していただければ、担当の先生方もすごく助かるんじゃないかなという風に思います。公演をただ鑑賞するだけじゃなくて、参加型の公演になるとさらに関心も高まりますし、子どもたちの成長にもつながる高い教育効果が期待できるのではないかと思いますので、ご検討いただけますとありがたいです。いろいろな文化活動に対するPRについても、ぜひ教育委員会を通していただいて、学校でもお届けいただければまた保護者の皆様にお届けできると思いますので、子どもたちにアプローチするということは保護者の皆様に伝わるということですね。そのあたりもご検討いただけますとありがたいと思います。よろしくお願いします。以上です。

□水永

ありがとうございます。学校に来ていただいて、話を実際に見るとか演奏してもらおうということだけじゃなくて、子どもたちがそれを体験するというようなカリキュラムがあると、もっと子どもたちに響くのではないかというご意見だったと思います。それでは青井さん、お願いいたします。



□青井

ご来場の皆様の中にも、おそらく多くの方々が日ごろ様々な文化活動に携わって、日々の生活が楽しく充実したものになっているということがあるのではないかと思います。そしてまた皆様の中には、自分の思いだけにとどまらなくて、そういった文化活動を子どもたちにちゃんと伝えていきたい。そういうお気持ちをお持ちの方も

いらっしゃるのではないかと思います。私とも同様でございます、先ほどから本年度の様々な事業をご紹介させていただいたのですけれども、ただ私たちが現在行っている取り組みというのは、この文化センターなり野口遵記念館に市民の皆様が来ていただかないと、思いが伝わらないし目的が達成されないんですね。それで来場者対策は課題だということを申し上げたのですが、今後はこういう取り組みも大事なんですけれども、今後は先ほどからお話もでているのですけれども、より積極的に

地域に出ていく活動というのでしょうか、そういったものも必要ではないかというのを現在強く感じているところです。ご案内のように、今文化連盟の谷口さんがいらっしゃいますけれども、文化の裾野は非常に広がっています。音楽ひとつとっても、その中にクラシック音楽もあれば、歌謡曲もある、さまざまですし、その他にも演劇とか様々ございます。幸いなことに、この延岡というのは、そういう文化活動に携わる方が非常に人材的に多い、そういう風に感じています。そういう方々にぜひともご協力をいただいて、保育園や幼稚園、小中学校等のご要望にかなう形で出前公演を行う、そういったアウトリーチ活動というのを充実できないかと非常に強く思っております。この活動は、3つの効果があるというのでしょうか。先ほどから出ていますけれども、小中学校等においては、身近なところでそういう芸術文化に触れる機会が広がるというのが1点ございます。それから、そういった演奏等で派遣される方は、そういった活動を通じて、自分たちのスキルアップにつながる。そして引いては、延岡市の文化振興に貢献するというか、そういった大きく3つの効果があるのではないかと。おそらく皆さんご存じの方もいらっしゃると思うんですが、現在の滋賀県で近江商人というのが全国的に活躍されている江戸時代に、その人たちの経営理念で「三方良し」というのがあります。聞かれたことがあると思うんですが、まさに私が今言ったアウトリーチ活動というのは、そういうことが言えるんじゃないかなということで、今後具体的な実施方法等については、様々な課題がありますので、検討していきたいと思っています。どうぞご協力をお願いしたいなという風に思います。それからもう一点、今後私たちが取り組みたいことで申し上げます、子ども向けの公演については、今後できるだけ親子招待枠というのを設けていきたいと思っています。この大ホールが1300席入ります。大体いろんな公演をやるんですけども、入場者が1,000名超える公演というのはそんなにございません。そのときに、2、300席余るんですね。そういった部分を招待枠に充てることが可能です。私たちも何回も経験して、いつももったいないね、もったいないねという話を職員間でしているんですね。それでできれば、そういった大ホールを活用する公演については、2、300席の招待枠を設けて、申し訳ございませんが、私どもが毎年度、数校を指定させていただいて、その対象校にご案内して、保育園や幼稚園、小中学校では、保護者の方に情報を流していただいて、申し込みについては、直接、保護者から文化センターなり野口遵記念館に電話等で申し込んでいただく。そういう形で運用できないかなという風に思っているところです。これについても、今後、そういった具体的な方法には、ちょっと検討の時間が必要だろうと思うんですが、このような取り組みを通じて、少しでも子どもたちが文化芸術に触れる機会が広がっていけばいいなという風に思っているところです。以上です。

#### □水永

はい、ありがとうございます。アウトリーチというのは、出前公演と言われましたけど、学校とか地域でニーズのあるところに、文化センターや文化団体の行事を持っていくという動きだと思います。非常にニーズに合った活動になっていけるんじゃないかなという気がしました。それでは最後になりますけれども、谷口さんの方からお願いいたします。

#### □谷口

では皆さん、最後ですので、画面のほうをちょっと見ていただけますでしょうか。実は、今日シンポジストの皆さんが話をされたように、現体験の場が欲しいということで、11月29日、30日、文化連盟、すべての団体が協力する中で実行に移します。ぜひ11月29日、30日、今日はメモして帰

ってほしいな。第1回、今まであったものをリニューアルしてスタートします。子ども文化の祭典。キャッチコピーが子どもとつなごう。このつなぐにはいろんな意味があります。人と人のつながり、文化と人のつながり、いろんなつながりを考えております。単純に人と人を文化とつなぐだけではなくて、そこのもとにはワクワク、ドキドキしながらの体験を積んでいきましょう。今まではステージ発表を見る、作った作品を展示して見る、見る、知る、聞くというところで終わっていたのを、今回は体験、動く、実際にやってみるということを大事にしたいと思っております。次よろしいですか。せっかく延岡の文化、歴史もあります。それを継承してこられた皆様がおられます。そして単純に継承していただくだけではなくて、どうせなら世界に発信できる力をつけていきたいなと思っています。多様性、語学力、失敗を恐れない、失敗してもいい、互いを認め合う、こんな行動力を子どもたちにすごいなって思うきっかけを、この2日間、この2日間で全てができるようになるわけでは決してありません。ただ、やっぱり何かに触れるってすごいね、面白いね。お父さん、お母さん、あそこにもう一回連れて行ってと。お父さん、お母さん方も、あるいはおじいちゃん、おばあちゃん方も、ちょっと自分もやってみようかなと思う機会に、子どもが体験する姿を見て、自分もちょっとやれるかもって思ってもらったり、一步を踏み出す機会に、この2日間になるといいなと思っています。単なる文化の体験にとどまるのではなくて、延岡の子どもたちが、いずれ延岡のためにも、そんな機会になるといいなと思っています。ちなみに今回、ハートグローバル、特別ゲストでハートグローバルということを書いておりますが、宮崎県では初めてのプログラムになります。単純に見て終わりというステージではなくて、前日から約100名近くの子どもたちを募集して、全員でキャストと一緒にステージを作り上げる。すべて英語です。別に英語が話せなくてもチャレンジしていただけます。歌とダンス、そしてそれは英語で。年長さん以上であればチャレンジできるというものです。もちろん小学生、中学生、希望すればどんどん入っていきます。ETM、これも英語と読み聞かせであったり、簡単なリズムダンスであったりということで、ここは九州で初めてやってきます。ハートグローバルは、母体はアメリカです。同じくETMもアメリカのミシランです。あとこれには書いておりませんが、ウクライナのユリア・ボンダレンコさん、4月にもちょっと1回来ていただきましたが、このウクライナのアーティストもこのイベントには参加をしていただく予定です。今日お越しの皆様方で、もしうちはまだ文化連盟に入っていないけど、ぜひ参加してみたいという思いを持たれた方は、ぜひ文化連盟にご相談ください。みんなでいろんな機会を創出して、延岡の子どもたちが豊かな心を持って、いずれ延岡のためになって思ってくれる、そんな考え方を持ってもらえたらと思っています。長くなりました。すみません。

#### □水永



最後に具体的な提案をいただきました。文化の祭典ということで、延岡にある様々な文化団体が結集して、こういう風な活動を取り組みをしていくということだと思います。本当に期待をしたいと思います。ありがとうございました。大変長時間になったんですけれども、最後に一言だけお話をさせていただきたいんですけれども、この延

岡には非常に多様で豊かな文化と人が育まれてきたんじゃないかなという風に思うんですね。一つはお大師さんという名で親しまれてきた大師祭の力があると思うんです。ここに昔から近隣の町か

ら様々な方々が老若男女が集まってきて、そこからお接待と呼ばれるおもてなしの文化が育まれてきたんじゃないかと思うんですね。もう一つは江戸時代からの内藤家による深い文化のたしなみがあったと。その一つとして天下一薪能が今も継承されている。これは他の地域には願ってもないことなのにこれからしかできないことだと思うんですね。もう一つは昭和の初めから工都延岡が形成される時に九州だけではなくて全国各地からいろんな技術者と商業者がこの延岡に集まってきておられるんですね。非常に多様な人々がこの延岡で暮らしをされてきた。その中で多様な人が織りなす習慣とか生活が作った人の力があるんじゃないか。これを今風に言えば市民力とか地域力とかいう風になるんじゃないかなと思うんですね。こういったこの延岡の文化の伝統を次世代を担う子どもたちに伝えていく役割と責任が 我々にあるんじゃないかなという気がいたします。今日お話をいただいたんですけれども地域社会の団体の方からは子どもたちに向けて積極的に応援を支援をしたいというお声掛けをいただきましたし、幼稚園、小学校の先生の方からは学校として地域の人たち文化団体の人たちと連携をもっと大きくしていきたいという声がありました。こういういわば共同、最近では協働という言葉が使われますけれども共に働いていく。そういう学校と地域と家庭と一緒に力を合わせていくような地域にこの延岡がなっていくと非常に将来にとって大きな力になるんじゃないかなという気がいたしました。

最後に具体的にですね 文化センターの青井さんの方から アウトリーチの活動という提案がありました。それから最後に谷口さんの方から第一回の子ども文化の祭典という具体的な提案がありました。このいずれもですね、この延岡に多く存在している文化団体の方々の力を結集して、そして特に次世代を担う子どもたち、もちろん子どもたちだけではなくて全ての世代の人たちに対して、文化活動によって何かを得ていただくようなことをつなげていこうということでした。こういうことを積み重ねていくことで 何か新しいコラボレーションが生まれてくるんじゃないかなという気がするんですね。それが心豊かな子どもたちを育ていく延岡になるんじゃないかなという気がいたしました。今日ご参加の皆様、最後までご参加いただきまして本当にありがとうございました。みんなで力を合わせてやっていけるようなことができると思います。

以上で終了させていただきます。本当にありがとうございました。